



能「正尊」



故森本司郎を偲んで
さくらざか能 特別公演
大人数で演じられる能・狂言をみてみませんか！
能、狂言の立方（装束を付けて演じる役）は二人〜五人位が多いですが、今回は狂言「弓矢太郎」に八人、能「正尊」に十五人登場します。大スペクタクルな能・狂言をお楽しみください！

能 正尊
狂言 弓矢太郎
独吟 玉取
舞囃子 藤戸

起請文 翔人

森本 哲郎
野村 万禄
山本 順之
山本 章弘



狂言「弓矢太郎」

令和4年 12月3日(土) 13:00開演 (12:00開場)

大濠公園能楽堂 福岡市中央区大濠公園1-5 ☎092-715-2155

S指定席 8,000円 / A指定席 6,000円 / 自由席 (桟敷席) 4,000円

主催/森本能舞台 後援/福岡市 (公財)福岡市文化芸術振興財団 協力/エムアンドエム

ご挨拶

どの業界もコロナウイルス感染症の影響で今までの生活が崩れ、大変な思いをされていることとお見舞い申し上げます。この度、文化庁「ARTS for the future!2」の助成をいただき、長年続けて参りました『さくらざか能』の特別公演を開催致します。

今回、能「正尊」には、立方15人、囃子方4人、後見3人、地謡8人と総勢30人、狂言「弓矢太郎」には立方8人、後見1人の総勢9人の能楽師が登場するなど、特別公演らしい迫力のある舞台となっております。

また、来年1月が父 司郎の27回忌であることから、山本順之師に独吟「玉取」を、山本章弘師に舞囃子「藤戸」をお勤め頂きます。

司郎の孫にあたります英太郎（6歳）と絢子（5歳）には、それぞれ舞囃子「猩々」と仕舞「玄象」を勤めさせます。

今後も九州の能楽の継承・発展のため努力して参りますので、温かいご支援の程、宜しくお願い致します。



故 森本 司郎

令和4年 森本 哲郎

良いお席はお早めにお申し込み下さい！

チケット料金	チケット9月10日発売開始
S指定席	8,000円
A指定席	6,000円
自由席 (桟敷席)	4,000円

※当日券は1,000円増し
※能・狂言の詳しい解説や出演者の紹介を載せたパンフレットを当日お配りいたします。
※未就学児入場不可

チケット取扱い・お問い合わせ

森本能舞台 ☎092-711-8888 FAX:092-711-8181
Mail: m-nohbutai@hor.bbiq.jp
http://m-nohbutai.com/

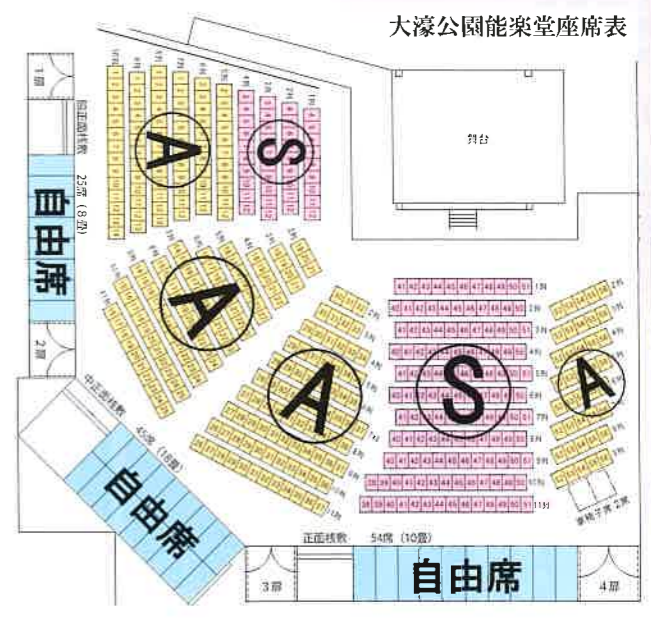


WEBでのチケットお申し込み

森本能舞台 検索

チケット取扱い

- ・大濠公園能楽堂 ☎092-715-2155
- ・エムアンドエム ☎092-751-8257
- ・チケットぴあ [Pコード515-107] WEBまたはセブンイレブンにて販売
- ・ローソンチケット [Lコード81390] WEBまたはローソンにて販売



〈会場〉大濠公園能楽堂 福岡市中央区大濠公園1-5

交通アクセス

- 地下鉄「大濠公園」駅より徒歩7分
- 西鉄バス「大濠公園」または「黒門」バス停より徒歩3分

※能楽堂には専用駐車場がございません。大濠公園内および近隣の有料駐車場をご利用ください。※能楽堂館内でのご飲食はご遠慮ください。



(目安所要時間)

(1分)

(3分)

(40分)

(4分)

(18分)

(3分)

(80分)

(終了予定16:20頃)

ご挨拶
解説
森本 哲郎
山本 百合子 (福岡教育大学準教授)

玄象
仕舞
森本 絢子
地謡
多入島法子
菊本 美貴
今村 宮子
菊本 澄代
木月 晶子

狸々
舞囃子
森本 英太郎
大鼓 白坂 保行
小鼓 幸 正佳
太鼓 田中 達
笛 森田 光次
地謡
井内 政徳
久保誠一郎
森本 哲郎
今村嘉太郎

弓矢太郎
狂言
太郎 野村 万禄
当屋 能村 晶人
太郎冠者 炭 哲男
立衆 小笠原由祠
立衆 吉住 講
立衆 上杉 啓太
立衆 吉良 博靖
立衆 清水 宗治
後見 小笠原弘晃
後見 働キ 杉山 俊広

笹之段
仕舞
今村 宮子
地謡
多入島法子
菊本 美貴
菊本 澄代
木月 晶子

藤戸
山本 章弘
大鼓 白坂 信行
小鼓 幸 正佳
笛 森田 光次
地謡
樹下 千慧
河村浩太郎
今村嘉太郎

玉取
独吟
山本 順之

能
(休憩20分)

正尊
起請文 翔入
弁慶 福王 和幸
大鼓 白坂 保行
小鼓 飯富 章宏
太鼓 吉谷 潔
下女 小笠原由祠
地謡
水田 雄吾
山本 章弘
坂口 貴信

姉和 野村 昌司
立衆 河村 浩太郎
立衆 井内 政徳
立衆 河村 和晃
立衆 山本 和晃
立衆 河村 和貴
立衆 今村 哲朗
立衆 樹下 千慧
後見 坂口 信男
味方 團
小田切康陽
地謡
水田 雄吾
山本 章弘
坂口 貴信
山本 順之
久保誠一郎
山本 順之

【解説】

◆仕舞 玄象 (げんじょう)

村上天皇の霊は、海底に沈んだ琵琶を藤原師長に与え、舞を舞う。

◆舞囃子 狸々 (しやうじょう)

中国のお話。狸々(海の精霊)が海中より現れ、親孝行の男にいくら汲んでも尽きることのない酒壺を与え、祝福する。

◆狂言 弓矢太郎 (ゆみやたらう)

天神講(菅原道真の命日)、に行われる天満宮の祭。和歌や連歌などの興行もされた)の夜、当屋(当番)を勤める何某の家に講中の人々が集まる。話題は臆病者で弓矢をいつも持ち歩いている太郎のことに、本人が来たら恐ろしい話をしておどすことにする。やって来た太郎は、皆の目論見通り怪談話でおどかされ目を回して倒れる。気が付いた太郎が強がりと言うと今度は鬼が出るという天神の森へ行かされることに…。



和泉流のみにある曲。大勢者で、前半と後半のめくるめく展開に目が離せません。

◆仕舞 笹之段 (ささのだん)

我が子を見失った女が笹を持ち狂い歩く様を見せる。

◆舞囃子 藤戸 (ふじと)

無残に殺された漁師の怨霊が現れ、苦痛を述べるが、弔いを受け、成仏する。

◆独吟 玉取 (たまとり)

善根を積む玉取長者と悪業の下に生まれた貧女の敬神と孝行の話。「玉取」という曲の一節。

◆能 正尊 (しょうぞん)



都堀川の邸に謹慎する義経を打つべく鎌倉から土佐坊正尊がやって来る。弁慶は正尊を堀川の邸に連行し、上京理由を詰問するが正尊は熊野参詣のためと言いつ張り起請文(神仏への誓いの言葉を書き記した文書)を書いて読み上げるので、義経は偽りと知りつつもその名文に感心し、酒宴を設けて静御前に舞を舞わせ、もてなして帰す。(中入)女を派遣して正尊の宿所を探らせ討入りを察した弁慶が武装して待つところに、正尊が郎等を従えて攻め寄せ、両者は激しく戦うが正尊側はみな討たれ、正尊も生け捕られる。「正尊」の起請文の語は、「安宅」の勅進帳、「木曾」の願書とともに、「三説物」と言われる重い習い物となっている。前半は緊迫感のある問答と謡により、正尊の才気、それを認める義経の心意気などが描かれる。後半はうって変わって、変化に富む戦闘の場面が見どころで、義経側、正尊側、それぞれ数名ずつが入り乱れるように斬り合い、さまざまな技を尽くし、大変見ごたえがある舞台となっている。

